

我が日本民族をキリストへ

日本民族総福音化運動協議会

第14号

「二つのJ」に

身を捧げる運動として

副総裁・事務局長
高砂教会 牧師

手束正昭



私は時として次のような問いを受ける時がある。「『日本民族総福音化運動』と他の日本のリバイバルを求める運動とは、どこが違うのか。所詮、従来と同じリバイバル運動を別な名前を使って行っているに過ぎないのではないか」という問いである。確かに、「日本民族総福音化運動協議会」（以下「民福協」と略す）の働きは、他のリバイバルを求める団体と重なる多くの部分を持っている。にも拘わらず、我々の「民福協」の働きは他のリバイバルを求める団体の働きとは、次の点で決定的に異なっているように思える。

その第一は、これ迄の民族性を無視し乃至軽視してきた伝道方式の再検討を強く打ち出していくところにある。日本人はよく、「猿真似上手」と言われる。これは別に悪いことではない。この日本人の特性が技術、工芸を発展させてきた。しかし、この伝道に関しては、このこのことは

通用しないようだ。戦後、日本の教会は圧倒的に欧米の（特にアメリカの）キリスト教の影響下で伝道や教会形成が成されてきた。そのため、クリスチャンになるということは、何か欧米人のような人間になることのように思われてきた趣きがある。「キリスト教はバター臭い」と言われてきた所以である。

ところが、三十年程前から韓国型のキリスト教が日本に入ってきて、猛烈に伝道を始めた。その熱心さと一途さは、ともすれば生ぬるさの中にまどろみがちな日本の教会に大きな刺戟となり挑戦となった。しかし、多くの日本人達はその激しさとその権威主義に違和感をもった。かくて、アメリカ型のキリスト教も韓国型のキリスト教も、十分に日本人には受け入れられず、従来の人口パーセントの枠を越えることができず、アメリカや韓国の教会の日本人救霊の情熱と祈りとは虚しく空廻り

することになった。

一体、どこに問題があったのであろうか。それは一口で言えば「文化適応」（文脈化）が十分になされなかったことによる。考えてみれば、日本と近い文化的流れを持ちながら（両国共、儒教、仏教の圧倒的影響下にあった）韓国でキリスト教があれ程成功したのは、当時持ち込まれたアメリカ型のキリスト教を賢明にも十分に文化適応できたことが大きな理由の一つであろう。しかし日本の場合、戦後その様な努力が十分になされたと思えない。戦前にはあった。その典型的な例は内村鑑三のキリスト教である。しかし戦後は多くの日本人が敗戦の空虚感の中でキリスト教を求めたにも拘わらず、アメリカの占領政策の一環としてキリスト教の伝道がなされたために、日本人自身が主体的にキリスト教を受け止め、積極的に文化適応しようとする姿勢がどうしても希薄になってし

まったことは否めない。そしてそのうちに、韓国ナイズされた強烈なキリスト教が入ってきた。前述したように、韓国のキリスト教もまた日本人の肌にならず、今のところ成功しているとは思えない。実は日本人が韓国のキリスト教から十分に学ぶべき事は韓国のキリスト教が欧米のキリスト教を如何に上手に文化適應したかであって、韓国ナイズされたキリスト教そのものではなかったのである。

次に言うことのできる点は、民福協の働きは単に日本にクリスチャンが増えればよいとか、教会が成長し活性化すればよいということを目指すものではなく（勿論、このことは決してはずすことはできないのであるが）、日本の国が真の国家的アイデンティティに目覚めて、世界に対して人類に対して大きな貢献のできる国家へと再生していくことにあるのである。京都大学の中西輝政教授によると、日本は今や「文明の衰退期」に入っており、このまま放置するならば、やがて滅亡に至るといふ。ここで言う「文明」とは従来使われていた物質的意味合いのそれではなく、文化や伝統を含むその国の有り様を決めている一番根本にある「精神的魂」のことである。この部分がおかしくなり始めたことにより、日本の「文明的危機」が起こり始めた。何故こうなったかということについては、中西教授の名著「国民の

文明史」に譲ることにするが、日本が「文明的危機」に陥っていることは、心ある日本人達はみな肌で感じ取っていることである。

その最も典型的な兆候は、今や日常化してしまった「親殺し、子殺し」の現実である。動物でも親は子を庇い、子は親を慕い敬っている。にも拘わらず、毎日のように報道せられる「親殺し、子殺し」の報道は異常という他はない。私の若い頃（こういう表現をするのは、年をとった証拠）と言われそうだが）には、こんなことは稀であった。せいぜい一年に一件か二件位しかなかったように思う。確かに日本人の中で深い部分で溶解し始めていることをかんじているのは、私ひとりだけではあるまい。本来、日本人は極めて倫理性の高い国民であった。その倫理性の高さは、他の先進国（それらはみなキリスト教国）と比肩しても、遙かに優れていた。にも拘わらず、今日の日本社会の、日本人の体たらくぶりはどうしたことだろうか。一体日本人の中で何が起きているのだろうか。

このような衰退しつつある日本を見透かすかのように、今から十年程前、中国の元首相であった李鵬は、オーストラリア首相に向かって昂然と言い放ったという。「日本などという国は、あと二、三十年もすればこの地上から無くなってしまおう」と。ところが、このような李鵬の国

辱的発言に対して、日本政府は何ら抗議することなく、不問に付してしまつたのである。日本のジャーナリズムも殆ど取り上げることもなかった。かつて日本の法務大臣が「南京大虐殺はデッチあげだ」と本当のことを言っただけなのに、外交問題となり、ジャーナリズムも騒ぎ立て、時の総理大臣はやむなく法務大臣を更迭するという事件が十三年程も前にあつたのだが、李鵬の発言はそれ以上に国辱的問題発言なのに、日本の政府もジャーナリズムも不問に付したのはどうしてなのだろうか。それ程、日本という国は、聖徳太子以来の中国に決して従属しない「日の昇る国」としての気概を失つた「骨抜き国家」と成り下がってしまったのである。

今回の「毒キョーザ事件」にしても、中国は自国で起こつた過失であるにも拘わらず、あたかも日本に責任があるかのような発言を続けているが、このようなふざけた中国側の態度に対して、一体どこ迄日本政府が毅然として対応できるかを、私は注視している。もしこのまま、中国側のペースで押し切られてしまふならば、日本の衰退現象は危機的状態まできていると言えるかも知れない。

日本民族総福音化運動が他の日本のリバイバルと根本的に違うのは教会を復興し、成長させることを通して、滅びに向かいつつある日本をも

う一度再生させたいという強い民族愛、愛国心に根差すところにある。戦後日本は、GHQの洗脳とそれを継承した左翼教育やサヨクのジャーナリズムによって、民族愛とか愛国心ということが、何かいけないことであるかのように思わされてきた。しかし、考えてみれば、これはおかしいことである。民族愛や国家愛が詰めれば家族愛や自己愛もいけないということになる。何故ならば、自己や家族が拡大展開したものでこそ、民族であり国家であるからである。確かに、不健全なナショナリズムというものがある。それは自国家や自民族の覇権を目指し、そのためにその民族や国家を團結させるために、ある国家やある民族に対して、憎しみや怒りを植え付けていく教育や報道を「愛国教育」の名のもとに盛んになす行き方のことである。しかし、健全なナショナリズムは人間性の自然な発露であり、キリスト教信仰は決してこれと矛盾するものではない。むしろ、キリスト教信仰こそ、健全なナショナリズムを確立していくものなのである。それ故に、内村鑑三の次の言葉は、私達の民族総福音化運動の意味を最もよく表現している。

「わたしは、二つのJのために身を捧げたい。一つのJは『イエス(JESUS)』。もう一つのJは『日本(JAPAN)』だぞ。」

日本を揺り動かすメディア伝道

CGNTV (クリスチャン・グローバル・ネットワークTV)

東北ブロック副ブロック長
キリスト愛の福音教会牧師

坪井永人



メディア伝道の有用性

メディア伝道の有用性はすでに周知の事実です。コルベ神父による「聖母の騎士」(一九三〇年)を嚆矢とし、ケネス・マクビティ宣教師による「百万人の福音」(一九四八年)等々枚挙にいとまがありません。その他、ラジオ、テレビ、さらにはインターネット等のメディア伝道は、宣教の有用なツールとして使用されてきました。その中で、テレビによるメディア伝道は非常に難しい分野として、様々なチャレンジがなされてきました。そして今日本は、この分野において、神様からの新しい有用なメディア伝道の賜物を与えられようとしているのです。

ラブ・ソナタの秘密

昨年、全国各地において開催された韓国オンヌリ教会のハ・ヨンジョ牧師による「ラブ・ソナタ」は、日本の宣教史上に類を見ない新しい宣教の試みとして大きな関心呼びました。その聖会は「CGNTV (クリスチャン・グローバル・ネットワークTV) の日本開局記念行事として行われ、素晴らしい宣教の成果を上げましたが、特筆されるべきことは、

それを実行する上で大きな役割を果たしたCGNTVというメディア媒体のことでした。いままでは日本の聖会に無かった韓流スターによるショー演出というコンセプト、そしてプロデュースする力、それらの映像、音声、照明等のノウハウをもったCGNTVというプロメディア集団が存在した事実です。

日本を揺り動かす宣教ツール

日本宣教の閉塞感が論じられているまさにその時、二〇〇六年日本CGNTVが開局しました。CGNTVのリーフレットの中で、土肥隆一牧師(衆議院議員)が、「私はこんなことが日本におこるとは考えてもいませんでした。(六つの衛星で世界を包み、ミャンマー上空の衛星でアジアを網羅するTVを作るには)日本に放送の基地局を作り、番組制作のために多くのスタッフが必要で、これを維持する費用も莫大です。でも今、ここに実現したので、と率直な驚きの感想を述べています。このような商業TVにも勝る強大な信仰的TVのシステムは、日本のキリスト教界によっては実現の出来ないことです。まさに、神様

が「日本を揺り動かすメディア伝道というツール」を与えてくださったのです。

日本CGNTVの沿革

日本CGNTVは、韓国オンヌリ教会のハ・ヨンジョ牧師のビジョンの元、二〇〇六年十月、東京淀橋教会、大阪NHKホール開局行事「ラブ・ソナタ」の開催をもって活動が開始されました。同年十二月、日本CGNTV東京制作本部を新宿区大久保に設立、現在の日本CGNTV本部事務所が開所されました。同月二十四日から、「みことばに聞く」という日本人牧師の十分間メッセージを、大阪、神戸で撮影を開始、二〇〇七年一月、CGNTV諮問委員会が発足し、峯野龍弘牧師、竿代照夫牧師、市村和夫代表、白井公朗牧師、鈴木義明牧師、清水昭三牧師、チャン・ジュンユン牧師、パク・チョンヨル牧師、キム・ギョフン本部長が出席。日本側の支援体制が整えられ、本格的な活動が開始されました。同年三月、博多ラブ・ソナタから始まり、同年五月大阪、七月東京、十一月仙台、十二月札幌ラブ・ソナタにいたる全国を縦断する聖会が開催されました。二〇〇七年一年間に「みことばを聞く」で説教をした日本人牧師の数は、十四地区二百名にのぼり、その他、「三浦綾子(二部作)」「ドキュメンタリー等の制作がされ、三六五二四時間放送をもって、日本宣教への志向が為されました。

日本の諸教会へのチャレンジ

この動きを受けて、私達世界宣教

センター(主管牧師奥山実、担当牧師坪井永人)は、CGNTVを支援する働きをはじめました。まず、JTV(ジーザス・ジャパンTV)というテレビ宣教の会社をたてあげ、CGNTVのアンテナ、チューナーの頒布、取付け工事から始めました。CGNTVがどれほど良質な番組を制作しても、アンテナ、チューナーの普及が進まなくては、宣教の実がありません。何よりも、アンテナの設置に日本の教会が協力することが必要です。民族総福音化運動の諸教会が中心となって頒布運動を推進するならば、パイパルの導火線になるでしょう。又、日本側による番組制作が提案され、現在、「世界宣教達成のために」という奥山師の宣教セミナー(五十分番組八回)を製作中です。これは、JTVとCGNTVの初めての共同制作番組として全世界に放送される予定です。さらにCGNTVでの日本側制作スタッフの研修等が開始されており、これらのことは、単にCGNTVの働きへの支援に止まらず、日本の教会がCGNTV同等のメディア伝道の企画力、映像、音声、照明等のノウハウと機動力を持つことを意味します。これは一組織の行うべきことではありません。日本のすべての教会が一致して、CGNTVに匹敵するTV会社を作るべきです。日本にはこれらの賜物と志を持ったクリスチャンはいないのでしょうか? まさにこの時、神様が与えてくださった偉大なチャンスがいかに受け止めるか、日本諸教会とあなたにチャレンジが与えられているのではありませんか。